朝韓中の抗日と大日本帝国の瓦解（八）

―駁逆の明治維新―ドイツ農民戦争、十字軍、一向一揆、年貢半減策―

北島平一郎

大阪経済法科大学研究補助金による論文第八号

承前
第七章　宗教と戦争
一向一揆と宗教戦争
イスラムとセルジュック・トルコ
聖墓再興と十字軍
ウルバン二世（Urban II）
ハーミット軍団の進撃（Hermit Band）
第八章　十字軍の戦勢
エルサレム回復
第二回十字軍
第三回十字軍とサラジン（Salah-al-din Yusuf ibn Ayyub）
第九章　十字軍の終焉と影響

異端派攻略十字軍
異端派潰滅
第五回十字軍
十字軍の最后
十字軍の影響
第十章　ドイツ農民戰爭（3）
ヘルフェンシュタイン伯（Count Ludwig von Helfenstein）一家
ハイルブロン
フランコニア農民騒擾
農民要求

第七章　宗教と戰爭

一向一揆と宗教戰爭

宗教が現世の魂の平安と保護を求め、彼岸でのその永遠のやすらぎを祈るものであることはみた如く疑いないが、一方これから人々の現世的利益（リヤク）とその保全を求める心が、宗教の排他性、自己中心主義を生む。宗教のひきいる宗派が問題である。そこに人々は神の王国をみる。これをはなれては、自らの宗教はない。かえって災厄が見舞うと信じる。キリスト教が他の祈りをきびしくいましめ、イスラムは臨終にあたり、天使があらはれ、その教義を問い、イスラムとこたえたもののみが神の下へゆるされるが、そうでないものは苦患の闇に永久にしずむこととされる。各宗派

が各々この原理に支配されるからこうして衝突と争いが起る。わが仏尊しとする気持は絶対であり、妥協を許さない。ここに平安とやすらぎの宗教は、排他、自己防衛の争闘を属性とすることとなる。安寧を守るためのたたかいである。宗教戦争は絶対である。教義の為に人々は忘我となってただに戦う。

宗教は一体人類に何をもたらしたのか、魂の静安をみちびいたのか、争闘に皮肉を破り、血河を現出したのか。歴史、宗教戦争の事例はあまりにも多い。その基盤に社会経済的現実利益と世の変動があるとしてもその部分だけを論じたのでは物事の説明にはならない。そこに宗教心そのものの果した役割を無視出来ない。否、それこそが問題である。

一向一揆はまさに宗教戦争であった。「百姓のもちたる国」をつくるという現実的利益（リヤク）は一向念仏の教義にみちびかれてすさまじいエネルギーを生み出した。ドイツ農民戦争も宗教改革の熱情がほとばしってみた如き大争闘となった。宗教の教義をつらぬいて他を同化することが至福なのか、宗教を払拭して生きることが眞の幸せなのか、とまれ人類の歴史は宗教戦争で華々しくいろどられてきた。

一向一揆をみちびいてあれだけのエネルギーをはき出した一向念仏宗の宗教的現実を我々は決して無視出来ない。

イスラムとセルジュック・トルコ

さてこの意味の宗教戦争の源流をさぐってみると忽ち十字軍の戦いに逢着する。十字軍について考えると、これをみて、戦争の必要が宗教をかりたてたのか、宗教的戦意があの二世紀（終結まで六世紀）に及ぶ大戦争を必然としたのか、解釈、これまた忽ち困難となる。ここでは、あのエネルギーとか、あのすさまじい消耗とかいう言葉が何とむ

なしいことか。しかも人々は必死に戦う。一向一揆に於ても一世紀、百年間宗徒は必死に戦った。越前武生の一向一揆潰滅のあとから出たその遺書は、門徒衆血涙の戦いの有様を切々と訴えている。その源は宗教であった。十字軍について検証すると次の如くなる。キリスト教にとってまたイスラムにとって聖地はエルサレムであった（ユダヤ教も）。キリスト教にとってそこは聖墓（**Holy Sépulcher**）、即ちキリストが十字架からひそかにおろされてそこに葬られ、復活を迎えるという最も神聖なる場所であり、イスラムにとっては、予言者マホメット（**Mohammad**）が生誕地メッカから移った聖地であった。そこで予言者は天使ガブリエル（**Gubriel**）によって七天国を通って神のみまえにいたるのである。マホメットはそこで神から一日五〇回の祈りを命ぜられるが、モーゼ（**Moses**）の忠告でこれを五回にへらしてもらったという。この世界では、これは夢幻の出来事ではなく現実に起ったことだと信じられている。今日でもこの戒律といのりは厳修されている。

この聖地は、永くキリスト教徒の支配するところであった。そしてシャルマーニュ大帝のときに聖墓巡礼の慣行が生じ、これが年々盛んになっていった。これをイスラムはもとより看過出来ない。イスラムはアフリカ北岸からスペイン、シシリー方面を蚕食したが、中近東にも一〇世紀頃よりその勢力がセルジュック・トルコ（**Seljuks**）に代表されて浸透した。九八五年にボハラを支配したが、着々帝国建設に従事し、アバシッド・カリフ（**Abbasid Caliphate**）の下にその首長**Togrul Beg**にサルタン位がもたらされた一〇九二年には、その版図は、イラン、メソポタミヤ、シリア、パレスタイン、それにエヂプト国境を含む広大なものとなっていた。その勢威を決定づけた基礎は、一〇七一年に於てセルジュック・サルタン、アルプ・アルスラン（**Alp Arslan**）が史上不朽の名を残すマンチカート（**Manzikart**）の戦いで當時最強を誇ったビザンチン軍を撃破したことであった。小アジアの天地はここにセルジュック一色にぬり

つぶされた。

セルジュックの大帝国は戦の中から生れたことは言う迄もないが、コーラン（**Koran**）の戒律にあるその第六にジハード（**jihad**）がある（一、一神、二、祈り、三、寄謝、四、巡礼、五、ラマダン）。普通聖戦と訳されるが、ここに宗教と戦争の明確な一体性があると解釈される。しかしそれは決して攻撃や征服、支配を意味しないと主張され、あくまでイスラムの教えを冒涜するものを防ぎ、排除するという意味とされる。しかしいずれにしても宗教のまもりに武力が必要なことを喝破したことに変わりはない。

聖墓再興と十字軍

こうした情勢と動きから当然キリスト教世界に聖地奪回の運動が起ってくる。暴力には暴力という原理である。キリスト教も一方には愛と服従をとくが、眼には眼を、歯には歯をの教えと、また聖歌の一節には主は戦いも教えられるというのがある。十字軍がここから起るが、その直接原因は三つ考えられる。（一）聖地の回復。一〇一〇年には聖墓は狂熱的カリフ**Hakim**によって破壊されていた。これをいやし、聖地巡礼を再開すること。（二）教会の腐敗、堕落を矯正し、これを正統な教会制度と僧侶規範に再編すること、この為に聖地の再確立は絶対条件であり、これを放置することは出来ない。（三）スペイン、シシリー等西欧にはイスラム勢力の浸透が激しく、サラセン、バイキング、マジャール等に苦しめられていたが、後二者に追々キリスト教が浸透し、西欧勢力が力を回復してこれら異教徒の駆逐にのりだした。これが成功して一〇八五年にはスペインのトレドから、一〇八七年にはチュニジアのマーヂア、イタリアのピーサンとその周辺都市から、そして一〇九一年にはシシリーからイスラム勢力を完全に追い落した。

こうした風潮の中からグレゴリ―七世（Gregory VII）の敬謙な使徒であったウルバン二世（Urban II）が、機会をとらえて壮大な十字軍を企図し、これをもとに聖地回復の大号令を発するに至ったのであった。ウルバン二世は教会改革の熱心な推進者であり、これらの事業は教会改革と平行して行はれた。

十字軍は右にみた如き必然性と目的をもって活躍するが、その背景には勿論アラブ世界の中近東制圧によって欧州世界とキリスト教文化が非常な制約下に置かれることへの重大な反撥があった。アラブ世界に中断されると欧州とアジアとの連携が無になる。例えば、シルクロード、草原の道、海の道の三ルートを主たるものとして行はれていた欧亜の交易、文化交流が破壊される。地中海貿易と欧亜貿易の盛行は、古代から欧州の血肉であった。これら貿易によって種々の必需品、贅沢品が東西間に交換され、ひいて経済の盛行、流通、交換の慣行、種々の商慣習等が発達し、貨幣の使用が広がり為替、金融等も発展した。東西文学、美術の相互影響も強く著名なものも多く残された。火薬、築城（石造り）、戦術、戦略、火器等の東から西への影響も強かった。こうした東西文化・経済交流関係は、十字軍八回の遠征（一〇九〇―一二九一）とその外延としての聖ジョン騎士団（The Knights of St. John）等の活動（一一―一六世紀）の間、従来にも増して大いに進捗発達した。それが数百年の后の十字軍の敗北、アラブ中近東帝国の確立と共に一挙に断ちきられた。そして例えば東西交易の富は、アラブ世界が一手ににぎることとなった。こうした予測の下にアラブ世界の強大化を阻止することも十字軍発出の大きな背景と目的であったことを否定出来ない。

この最終一六世紀に於ける十字軍とその関連戦争の終息とキリスト教世界敗北（コンスタンチノープルの陥落）の結果、西欧の反アラブ運動が起る。それはアラブ世界を圧迫し、中東欧世界の対アラブ敗北を見下して、自身アラブの対西欧進出を阻止し、これを排除した（グラナダの陥落）スペインとポルトガルが、東亜の天地を求めて当時未知

の大洋に乗り出し、地球を東西から回航して欧亜の連絡を再開する所謂新世界発見の運動がそれであった。この運動は素直なものでなくキリスト教をかかげて東南アジア諸地域、南北アメリカ、カナダ等を植民地化し、スペイン、ポルトガルの大植民地帝国の建設の目論見がその骨子であった。その一翼はこれら植民地帝国の確立と共に日本にも及び、ヂェスイット教団を中心とする一連の日本キリスト教帝国化の波が強力にそこをおおう。その嚆矢はヂェスイット教団のフランシス・ザビエル（Francis Xavier）によって果された。一神教を信じ、多神教と偶像崇拝という迷蒙の闇にしずむ日本神道者や仏徒を救いこれをイエス・キリストと天の主たる神の手にゆだねようとする宗教師の熱情は全国をおおい、日本総キリスト化運動は強烈に燃え上る。これを迎えうつ日本仏教、神道のたたかいもまたすさまじいものがあった。もともと日本は同等多神崇拝の国がらで神仏同時併存でありその特徴は世界歴史に類をみないものであったが、一神教のキリスト教はこの教義（例えば神仏習合）を許すことは出来なかった。こうして日本人魂の浄化運動は綿々と激烈に継續しなければならなかった。もしその時、一神を信ずる真の宗教であるキリスト教が、偶像崇拝という幼稚な悪魔の宗教である仏教や多神を信ずる人格崇拝という誤った宗教である神道、これら神仏二宗を説破し、これを破脚して日本人総キリスト教と転じていたら、日本国に何が起っていたであろうか。これは馬鹿馬鹿しい問いかけであろうか。しかし我々はポルトガル、スペインの南北アメリカ、東南アジアでのキリスト教を名とする植民地確立の実行、この二国が導いたオランダ、英国の世界植民地帝国の確立史を考えれば、右の問いは幼稚なそれであるとは決して思えないのであるけれど…。

ウルバン二世

ウルバン二世の大号令で聖墓回復の十字軍が起されることになったが、このときピーター・ザ・ハーミット（**Peter the Hermit**）は出ででその伝令役を買って出た。これがハーミット大軍団を形成することになる。ハーミットというのはローマカソリックの伝統的修道士を意味し、戒律と苦行の中に悟りを求めるものであった。ピーターはこのときはだしで木の大十字架を背負い、破衣でロバにまたがり、聖墓回復の進軍を訴え歩いた。中欧のコローニュから旅は全欧をめぐり、スコットランド、デンマーク、スペイン、ハンガリーへとめぐった。

この訴えは薬がききすぎた。彼の下に集まった農民は踵を接し、その数一万五千人にも達したのである。大部分は農民であったが、無頼の徒や犯罪人も参加していた。この事実はまた重大な意味をもつ。即ち、ドイツ農民戦争や、一向一揆それに先だつ日本土一揆の説明にこれが先蹤となるからである。当時欧州の農業は、困窮状態に置かれていた。農業が全国家経済の中に占める発展の度合いが如何に困難かについては前稿（法学論集四四号第二章絶対矛盾の自己撞着（近代資本主義））にのべた。

① 欧州に於て農奴制は当時廃止されたが、これは名目的で、種々の制約と規制の中に農民は依然緊縛され、生活は苦しく従ってそれは、極端に不安定であった。農奴解放が如何に大きな犠牲を伴うかは、例えばロシア・アレクサンダーⅡ世のそれ、アメリカ市民戦争（南北戦争）のそれが如実に物語っている（法学論集四四号前掲論文）。本テーマが追求するドイツ農民戦争や、一向一揆の「農民の持ちたる国」イデオロギーをみてもそれは話半ばにすぎるものがある。

② 封建領主は農民の保護に当る義務を有したが、それも有名無実で、彼等は無頼の徒、賊徒などの襲撃、略奪の的であった。農地の整備も行はれず、各境界も荒れ放題で、森林の共有地伐採、再編等も領主の狩猟場が荒れるという

理由だけでコンミューンの権利は無視された。

③　大諸侯の下では、商業と市場経済を中心とするタウンの発達もうながされたが、多くの中、小諸侯の下では、これらは阻外、禁止され農業との共同も空しかった。

④　住居地の整備も行はれず、この時期洪水、乾魃飢饉等が交替的に発生し、一〇九四年の黒死病（ペストPestilene）は猛威をふるった。充分な医薬品もなかった。

この様な状況で貧窮（農民）層の不満爆発がハーミット軍団の形成となった。

ハーミット軍団の進撃

農民層を主力とし、種々雑多な分子を含んでふくれ上ったハーミット軍団は皇帝アレキシウス（ビザンチン皇帝Alexius I Comnenus）の嘉みするところとなった。これはウルバン二世の推挙によるもので、軍団はコンスタンチノープルを目指すこととなった。ここにこの軍団とハーミットの悲劇が胚胎する。軍団は一九〇六年四月一二日にコローニュに到着（ローマから）、ついでハンガリーに入り、ベルグラード、ニイシュ、ソフィアと進んで、八月六日、ボスフォラス（海峡）を越えた。コンスタンチノープルは指呼の間である。

しかしこの軍団は、なかなかとても一律の規律の下に統御することは出来ないものであった。隊員の中には妻子を同伴するものもあり、軍律として盗み、略奪、破壊、放火、暴行、殺戮等一切の悪業が禁止されていたが、彼等はこれらすべてを平気でやってのけてその上繰り返した。街々、村々に入ると、盗み、略奪が半公然と行はれ、暴行、殺傷も起り、ひどいのはその地のキリスト教会を襲い、鉛をはぎとろうというので、その屋根を破壊し、キリスト教徒

をトルコに支配されていたというので殺戮した。言語同断というもおろかである。東洋の君子国としてよく言えば極めて従順なおとなしい、悪くいえば弱虫民族である日本人の神経には耐えられない様な蛮行も行はれ、彼等がニカエアへ入った時、村々、街々が略奪され、キリスト教住民がかり集められて、拷問され、殺された。最も非道なのは、赤児を集めてきりきざみバーベキューにしたことであった。

これがキリストと法王の名で行はれたとしたら、十字軍をどう理解したらいいのか。宗教を守る為の戦争か、戦争の為に人々の宗教的団結を利用するのか。

このときピーター軍団は十字軍として参加者が、ぞくぞく増加し、独仏伊の領主や騎士も多数参加して、一説によると四万名もの多数になっていたと云う。彼等はマルモラ海岸のキポタス（**Cibetot**）に根據地を置いた。このとき独仏伊軍の間で反抗的気分が濃厚となった。イタリアの一領主レイナルド（**Italian Lord Rainald**）がピーターにかはって指揮官に選ばれた。彼は当然勇をふるい約六千の兵を率いてニカエアを越えクゼリンゴルドン城の攻略に向った。そして彼等はこの山城に入ったが、トルコ軍はこれをみて反撃に出、城を包囲して水道をたった。この為籠城軍は忽ち涸渇し、馬やロバの血をすすり、はてはお互いのユリーヌまでむさぼった。八日間の籠城の後レイナルドは降伏し、命乞いにキリスト教の棄教を誓った。彼はすくはれたが、信仰を捨てぬものはすべて惨殺された。しかもトルコ軍はスパイによってキポタスの十字軍本隊にニカエアが十字軍によって攻略され、戦利品の分配が行はれているとつげた。十字軍は忽ち興奮し、我さきにと分配めざして進撃した。トルコ軍は待伏せし、十字軍は道にとらえられて殲滅（セン）された。十字軍の指揮官は兵の暴走を禁止しようとしたが、空しかった。

この間ピーターはコンスタンチノープルへ入ってしまった。オポタスの本隊はピーター不在のままでクゼリンゴル

ドンの復讐戦を敢行したが、二万の軍勢はかえり討ちに会い、領主や騎士の大半は戦死し、ここにピーターの十字軍は再起不能となってついえた。トルコ軍はキポタスを襲いキリスト教徒を盡殺した。ただみめよき少年、少女のトルコ人好みのものは捕虜とされ、少年、少女奴隷とされた。

第八章　十字軍の戦勢

エルサレム回復

十字人民軍はピーターにひきいられて、みた如く結局潰滅してしまった。その間第一回十字軍は着々その進軍を行っていた。ウルバン二世の呼びかけに応じ、ピーター・ハーミットの叫びによりフランス、イタリア各地から諸侯、騎士等が多数これに参加した。それらはノルマンディの公爵（**Robert II Curthose**）、低地ロレーンの公爵（**Godfrey of Bouillon**）、ブロワの伯爵（**Stephen Henry**）等であったが、中でもツールーズ伯、レイモンド四世（**Raymond IV, Count of Toulouse**）とボヘムンド（**Bohemund**）が有名であった。前者は富を誇り、軍備をととのえていて十字軍の総指揮をとることを願っていた。ボヘムンドはアンチオークの実力者一族に属していた。

第一回十字軍は一〇九六年七月から一九〇七年五月にかけてコンスタンチノープルに入った。それからアンチオークの攻略がはじまった。このときボヘムンドが偉力を発揮する。情勢下、ビザンチン帝アレキシウスはアナトリア（現トルコ本土地帯）の奪還を夢み、そこからのムスリムの駆逐を望むに至り、十字軍各隊と諒解をとげた。ボヘムンド

はさきに父（**R. Guiscard**）とビザンチン帝国の攻撃に従軍していたが、十字軍に参加して態度を改めアレキシウスの野望に承認を與へた。しかしレイモンドは帝の地位と名誉を保障する誓いのみをのべるにとどまった。

アンチオークの攻略は、ボヘムンドが敵方の内通を得てこれを開城させた。しかしトルコ軍は反撃に出、一九〇八年六月二日これを奪回することに成功した。

アレキシウス帝は十字軍が彼の全要求を認めないというので食糧の供給を妨害したりして急速に野望の機会と影響力を失っていった。

ボヘムンドは復讐戦にたち上り、最后トルコ軍を撃破することに成功したが、機会をとらえてアンチオークの全城と全権を自らが掌握して、結局レイモンドを阻外、ビザンチン帝をも阻隔して独裁体制を築こうとする（一一〇〇）。この為当然各方面の反撃を蒙り、支配力の保持には力及ばなかった為、最后彼はムスリムの為に打破られて捕虜となり、一一〇三年迄囚圄の身となった。漸くこのときアルメニアのプリンスにたすけられ、身代金を支払って自由を回復した。しかし再びアレキシウス帝に挑むという放れ業を演じたが、最后、大敗して、帝の臣下に組入れられてしまった。十字軍をみるとそこに生命をかけた戦いの中で人間の最后的欲望に根づく種々のみにくい悪業が敢行されている。日本では明治以来戦争は天皇の正戦であるとのみ教えられていたので、こういった戦争観は絶えてなかった。日本の戦争は朝韓中の侵畧の為であり、戦争は正戦として、それに参加することは正しく清いことだと教えられて国民は明治以来そこにかりたてられた。その戦争観は平成の世でもたいしてかはらない。

アラブの首長達はカイロのファテミッド・カリフ（**Fatimid Caliph of Cairo**）に所属していたが、そのシィイート派とスンニ派との抗争の中でシィイート派が後者を打破ってエルサレムにそのファテミッド政府を打建てた。しかし

このアラブの統治は長く続かず一〇九九年の七月一五日、十字軍が占領したアンチオークから急速に勢力をのばしてベツレヘムを陥し、エルサレムに達して、これを包囲戦の后、遂に手中に奪回した。ムスリムとヂュウリィの殺戮が続いた。これから目まぐるしい変化が同地方に起る。

ここでこの地方に四ヶ国の領国が形成される。エルサレム王国、アンチオーク公国、ウルファ、トリポリ伯各領国である。それはエルサレムの聖墓の回復と共にその保護者(**advocatus**)という名目でブイヨンのゴッドフレ(**Godfrey**)がその任についたが野心家のディンベール（**Dainbert** ピサの大司教）の為に翻弄されてその地位を危うくし、擧句、亡じてしまう。これはノルマンジー公の牧師であってエルサレムの長老（**Patliarch**）の一人となっていたアーナルフ(**Arnulf**)の画策するところであった。しかし亡ゴッドフレの兄弟であったボールドウインがウルファの領地からゴッドフレの後継として一一〇〇年エルサレムにのりこんできた為、今度はディンベールが疎外されてエルサレムから追放されてしまう。ボールドウインは聖職とは関係薄く、單なる封建領主であったが、ディンベール大司教の下に同年クリスマスの日に自らベツレヘム（エルサレム）の王を名乗ることとなった。ディンベールは今回はボールドウインの為に一蹴されたのである。これを画策したのもアーナルフで、そもそもボールドウインをエルサレムに迎え入れたのが彼であった。その為彼はエルサレムの長老として残った。しかしこうして聖地回復の聖戦がそこに封建的統治を生み出すこととなり、教会と国家の支配という構図が後退する。十字軍は期間も長く、種々の要素を含んでいるが、こうした現象もあらはれたのであった。トリポリはツールーヅのレイモンドによって征服されていた（一一〇二―九）。これをみれば、ボールドウインがエルサレムの王国をたて、ウルファに伯爵領をたて、他を支配していた構図がわかる。その統治は封建領国のそれであったが、ボールドウインが軍事権をにぎり、王権を駆使して他の三領国を

支配し、エルサレムの長老、教会高位聖職者の任免権をもにぎっていたのであった。ウルファ以外の領国は地中海に面し、ここから貿易が促進されムスリムの商人達もここを訪れる様になった。領国は多民族国家で、エルサレムには生来のムスリムも多く、他の領国にはキリスト教徒が多かった。平和のつづく間は、商人、職人、工人、移民等が商工業、貿易に従事した。ここに十字軍の目指した社会経済的意味での眞の目的達成の一環がみられる。平和が宗教的相異や対立を捨象することが不可能ではないという一証左である。

第二回十字軍

ボールドウインがエルサレムを支配した頃から半世紀足らずの間、そこには、ムスリムとキリスト教徒の協力があり、右にみた様な平和と商工業の発展があった。しかしその后該地は再び十字軍とムスリムの爭闘のちまたとなる。双方が中近東地方から相手を駆逐しなければならぬという大義（?）のもとに行動している限り、爭いは不可避である。爭いの目的は何であるか、共存は不可能か、宗教がそれを命令するのか、ここでは宗教と戰爭の関係を考究すること、ひいては当時の欧亜の農民戰爭と宗教の関係、農民叛乱の社会経済的性格のそれ、がテーマである。故に十字軍についてもその限りの検討を加えるべきである。宗教的情熱と信仰の擁護を叫んで開始された十字軍であったが、今、一瞥しただけでもそこにはあまりにも種々の要素が混在している。いえる一つのことは、どの様な目的を蔵するとしても、宗教を名として人々が結集することは容易であるということである。国民総結集の手段として宗教は容易に利用される、ということである。しからば、結集を条件として宗教以外の要素が、それが何であれ、国民総結集の手段となり得ようことも否定出来ない。つまりナショナリズムの戰意昂揚ということであり、国民総結集の重大な契

機としてその意義も大きい、ということである。日本では明治以来天皇制が異常に強調され、昭和には天皇が自らを主張すること無しに、それがナショナリズムや軍部に利用された。そして植民地主義の国民総結集の重大な要素とされた。この場合にもその土台に神道主義という日本宗教があることは否定出来ない。

宗教は国民総結集の場合の強力な要素として何かの、どこかの部面に必ず顔を出しているということが忘れられてはならない。

かくして運命的必然として第二回十字軍が催される。ムスリム間内部の嫉視反目も根強いものがあったが対キリスト教主戦派であったモースルのムスリム統治者イマダルデン（**Imad-al-din, Zangi**）が立ち、このときジハードを高調、アレッポを攻略して、忽ちダマスカスを囲んだ。ダマスカスは彼の勢威におそれて一戦を避け、身代金を支払って自由を保持したが、イマダルデンは進撃を止めず、一一四四年遂にウルファを抜いた。これで第一回十字軍の成果は無に帰した。これが欧州と法王庁に大きなショックを與へ、法王ユーゼニュス（**Eugenius**）の第二回十字軍の結成、発出となった。フランスのルイ七世（**Louis VII**）、ドイツのコンラッド三世（**Conrad III**）等が集まり、参戦した。ヌルヂン（**Nureddin** イマダルデンの息子）出でてこれを迎え討ち、二王共にムスリムの為に一敗地にまみれた（前者は一一四八年一月、後者は一一四七年一〇月）。彼等はアンチオーク、アクレに退いて軍をたてなおし尚聖墓めざして進軍したが、ダマスカスを確保すべくこれを逆包囲した。しかし戰い利あらず、結局最后二王は囲みをといて撤退を余儀なくされ、第二回十字軍はこの為最終的に失敗に帰した。

第三回十字軍

スペイン、仏南部ではイスラム勢力は駆逐されたが、中近東のそれは強く十字軍は初期の目的を達成出来ない。このときイスラムにはヌルヂン、サラジン等の英傑が生まれる。

ヌルヂンは父の衣鉢をついでイスラムの統一とジハードの達成を呼号し、ダマスカスの奪回を目指してこれを毎年攻撃したが、一一四九年アンチオークのレイモンドをイナブの戦いで敗死させた。これで彼の名声は一擧にあがり、ダマスカスは門を開いて彼を迎え入れた。ジハードはシリア、パレスタインからのフランク（十字軍を構成する西欧人）の排除を目的としていたが、この為、エジプト・カイロの攻略が問題となって戦いの場はエジプトにも広がった。カイロはヌルヂンの強勇な武将アサダルディン・シルク（**Asad-al Din Shirqun**）によっておとされた。この間イラク、シリア、エジプトのムスリム間に大同団結の機運がもり上った。一一六九年、七四年と相次いでシルク、ヌルヂンが亡じ、ここにシルクの甥にあたるサラジンの登場となる。彼は智仁勇兼備の名將とうたはれ、西欧人の中にもこの敵將をたたえる人が多くあらはれる。

サラジンはイラクに生まれアユブ（**Ayyubid Dynasty**）王朝の創始者となる。彼は叔父シルクのフランクとの戦いに三度従軍して頭角をあらはしたが、この時ジハードの目標はシリア、エジプトに進出したフランクを追い落とすことであった。エジプトでは内乱ぎみの権力争いが続いていたが、さきにヌルヂンはサラジンにすすめてエジプトのファタミド・カリフを廃してしまっていた（一一七一）。そしてヌルヂンの死去（一一七四）と共にサラジンは独自のジハードを展開する。叔父とヌルヂンが達成したエジプトの十字軍覆滅によってサラジンはエジプトのシリア軍の司令官としてエジプト改革に乗り出し、経済振興案をはかると共に交易を盛んとし、種々の建造物、学校、城塞、そして水道を建設してエジプト繁栄の基礎をつくった。十字軍には名だたる名將智將は生れなかったと言っていいが、

サラジンは頭一つぬけ出る支配者ぶりを発揮してヌルヂンと共にイスラムの為に万丈の気をはいた。

サラジンの名を不朽にしたのは、第一回十字軍以来八八年間敵手にまかされたイエルサレムを彼が血戰激闘の末一一八七年七月奪環したことであった。

ヌルヂンの死后乱れたシリアを建直すべくシリア平定にも乗り出したサラジンはダマスカス、アレッポを確保し、モースルを越えてイラクのイルビルにまで進出した。彼はこの機会をとらえてエルサレムに進撃する心魂であった。そして北パレスタインに入って結局全パレスタインを席捲し、死闘の后、これを征服した。このときエルサレムのキリスト教徒に寛大な取扱いを約束し、彼等と協定に達してエルサレムを回復したのであった。エルサレムこそはキリスト教、イスラムの双方の聖地であり、この聖地は教徒に幸福と安寧をもたらす心のよりどころであるべきところ、その支配をめぐる一神と一神の抗爭はこの如き決定的血戰を双方に強いるのであった。神、是か、教徒、是か、神、非か、教徒、非か、宗教、是か、宗教、非か。多神教である神仏習合の異教徒はこれを如何に叙すべきなのであろうか。

サラジンのシリア席捲の中でチイルは十字軍の據点として唯一残り、ここへ欧州からの物資と軍隊が到着する。第三回十字軍の攻撃目標はアクレとなった。この攻防は激闘実に二年を閲し、アクレのムスリムは十字軍に包囲されながらサラジンと連携して籠城戰をたたかいぬいた。これが陥落したのは一一九一年七月一二日で、十字軍中名をはせたライオン・キング、リチャード（**Richard I Cœur de Lion**）と英十字軍の精鋭が到着した為であった。しかしこのとき十字軍はアクレ奪還が精一杯で、これを機として帰欧するものが増加、中近東のムスリムを撲滅するに由なく、サラジンとリチャードの間に休戰がはからはれ、一一九二年九月二日、戰闘休止となった。十字軍はアクレと海岸線

を保持したがシリアとエルサレムはサラジンとムスリムの手に残り、中近東のムスリム勢力は抜きがたいものとなった。サラジンはこの休戦協定の后ダマスカスに戻ったが、一一九三年三月四日、数日の病の后亡じた。

第九章　十字軍の終焉と影響

異端派攻略十字軍

かく十字軍とムスリムの激闘は果しなく続く。第三回十字軍はみた如くアクレの攻防となったが、これはグレゴリ―八世が死の床でエルサレム奪回を目ざしてその発出を布告したものであった（一一八七年一二月一七日）。その成果は前述の如くなったが、このとき十字軍に別の難問、異端キリスト教徒との戦いがもち上る。第四回十字軍は一一九八年八月一五日インノセント三世によって宣言されたが、これは、軍隊の輸送問題でベニスと確執を起し、またビザンチン皇帝の帝位争いにまきこまれ、最后コンスタンチン一一世（Constantine XI Lascaris）が帝位につくなどの十字軍以前の問題が種々あった。このとき従来よりキリスト教徒間の事端を繁くしていたフランス南部の異端派（Cathari (Cathars) Albigenses）に鉄槌を下すことが法王の命で急にうかび上り、十字軍はこの処理に従事する（Albigensian Crusades）。

キリスト教の異端というのは、偶像崇拝の極東の異教徒には理解し難い面が多いが、これは、勿論キリスト教の一神主義から起るので、多神教は多くの神々をもち、特に日本では、従古から神仏習合、本地垂迹として神仏二教が抱

合併存して平成の今日にまで至っているのである為、異端という意味が、その面では理解しがたい。しかし例えば神道で天照皇大神を攻撃もしくは否定し、仏教で釈迦牟尼佛の存在を認めないということになると、多神教だからといって安閑としていられない。ここがむつかしいところである。多神教というのは、多くの神々をもつが、それは一つの宗教体系を有するので、つまり天照皇大神（天御中主神が神譜上の最高神）や釈迦牟尼仏を頂点の主としてその下に多神が存在するので、その意味では一神教とかはらない。神道では、天照皇大神を主神として八百万神を同時に祀り、礼拝する。仏教では釈迦牟尼仏が主であるが、日本では各宗派が起ってそれらは夫々仏典の中の一つの経典を選んでこれを教義とする。仏典であることにはかはりがないが、例えば律宗は「四分律蔵」經を教義とし、ここにとりあげる一向宗は、「観無量寿經」をそれとする。こうみると同じ多神教でも神道の方は眞の多神でおおらかであり（神道にも八幡信仰、稲荷信仰、出雲信仰等、種々あるがこれら仏教程系統的組織的ではない）、仏教の方は釈迦牟尼仏を頂点としながら各宗派が起り、これが競いたって宗派宗教を形成する。そしてお互いに自派を最高の仏道として他派を排斥、攻撃する。狂言には二人の僧が各々自派を宣伝し（南無妙法蓮華經と南無阿弥陀仏の衝突、「宗論」）、他宗をけなす脚本があるが、仏各宗の他宗攻撃は、日蓮宗で極端な様相を呈する。即ち同宗は「法華經」を教義とするが激烈な他宗排斥で、例えば、「眞言亡国、律国賊、念仏無間、禪天魔」等ととなえる。他宗はたまったものでない。しかしこれが原因ともなり、宗祖日蓮は種々の迫害にあう。かくみると、仏教では異端というのは神道などではなく、同宗内の併列的相克が属性であるとなる。仏教に於ても、釈迦の教えや「厭離穢土、欣求浄土」といった一般思想は厳然として存在するのであるけれど…（これらについては尚後考を要する）。

キリスト教（カソリック）が、ここにいう異端というのは究極に於てバイブルの内容をゆがめ、キリストを批判、

排斥するというものであった（反バイブル、反キリストという強烈な面があった）。これはキリスト教にとって決して無視出来る存在ではない。

ここにいう異端はキャサールス（**Cathari, Cathars**）と呼ばれるそれである。これは、一一世紀、一二世紀頃から南部フランスに猖獗し、イタリア南部にも及んだ。バルカン、近東にも流行していた（**Paulicians, Bogomils**）。その教義はキリスト教の一神主義に反する二元論で、キリストと悪魔（**satan**）の併存を原義とした。そのとく根元は「善根は善神の精神的世界にのみ存在し得る。物質世界は悪である、それは、サタンと呼ばれる悪神、もしくは霊によって創造される。かく善根と悪は二つの相別れた創造者をもつのである」、と。これだけみると矢張り、極東の多神偶像崇拝の異教徒にはよくわからない。「人はパンのみにて生きるものにあらず」というのはキリスト教の有名な咸言であるからである（つまり、キリスト教もその限り二元論の要素をもつのではないか、ということである）。何れにしてもキャサールスは精神をのみ重んじ、肉や物質を排除してしまう。そして生殖活動をさえ否定するにいたる。それは出産の恐怖をもつからであり、精神を肉の世界にふけらすからである、と主張する。この思想は、仏教の原義にも重大な戒律としてとかれた。またキャサールスは肉食を禁じる。これは人肉食を意味するからという。これはまた仏教の原義の一つである。即ち「肉食妻帯」を禁ず、というのは「葷酒山門に入るを禁ず」と共に仏教の一般的重大戒律としてひろく流布し、日本人口に膾炙していた。しかしこれが守られ、実行されたという例はない。日本では仏教が性行を禁じ、そのおしえは一般的となって種々の小説や演劇に仕組まれ一般的おしえとなって世間に行はれていた。例えば、久米の仙人譚や、歌舞伎一八番の鳴神上人と雲の絶間姫、櫻姫全伝曙草紙（山東京伝）の櫻姫と清玄等、戯恋をたしなめる、又こらしめる説話が流布した（しかし一方、絶間姫なぞというのはいかにも煽情的な名前であ

る）。これも日本社会の江戸時代における倫理主義のあらはれであろうし、また近親双姦をドギツクいましめる芝居もあった。こうしてみるとここまではキャサールスのとくところと日本仏教のとくところに広く深い同一性がみられる如くで大変興味深い。そもそも善根、悪玉論は江戸時代の倫理主義の一つのテーマで心学の隆盛と共に世間一般に広く用いられ、その講舎は石田梅岩、中沢道二等から出て、江戸、近畿を中心に全国的に開かれた。その講義の場は興味あり、「男女七歳にして席を同じうせず」、の教えに従って講義場の一隅にみすでかこって女子席が設けられていた。山嶽仏教が女人禁制を制規としていたのもこれら風潮のあらはれであろう（勿論すべて主動者は男性ということになっている）。

社会には生活上義務観念がすべての面で必要不可欠で、この点キャサールスと仏教のとくところは同一である。これを忘れ、もしくは捨象してしまう社会は、悪平等、悪自由のそれで、一切の義務観念を放擲して自然生活にかえり、犬や獣の様に振舞うことが人間本然のあるべき姿であると主張する社会は、亡国の芽をはぐくむこととなろう。

但しキャサールスはこの上に、自殺を尊重する。こうなると大変で、自殺尊重の思想なり、教義は神道、仏教どこにもない。キリスト教は洗礼主義で大いに赤ちゃんの誕生を祝い、奨励するものである。また自殺は厳しく禁ずる。（キリスト者の小西行長が関ヶ原で敗れて自害せず、斬首されたのは彼の教へへの忠実であったと言われる。しかしあの時西軍の領袖の中、癩者の大谷吉継を除いて誰も自殺しなかった）この点キリスト教がキャサールスを異端としてしりぞけるのもむべなるかなと云わざるを得ない。しかしこういった思想は宗教観そのものとして今日の社会にも根強く存在し、そのあらはれが夫々の実行となって天下国家に大いに物議をかもすのである。

キャサールスと仏教が同じカテゴリーで倫理観を高調している面があることはまことに不思議なことにさえ思える。

一一、二世紀の欧州の宗教と仏教と似かようところが強くあったのであろうか。

異端派潰滅

キャサールスの特異な教義は尚種々のものがある。結婚を組織的悪徳として排斥するが、偶発的性的悪徳は許容するとし、また男色や獣姦をベターとする。こうなると神道や仏教とは全く相入れない特別のものである。いわんやカソリックに於ておや。キリスト教が許せないのは、これが聖書、キリストを否定することである。まず旧約聖書はすべては信じがたいとし、ある人々はこれを全面否定する。聖書外典（apocryphal）といったものを問題とする。新約聖書についてはこれに新解釈を施して受容するという。そして最も重大なことは、パンと葡萄酒がキリストの肉と血であるとし、聖餐式に於てこれが化体するという教義を否定し、化体（incarnation）はキリストの精神を人間の肉体の中にとじこめてしまうとこれを全面否認した。そして更にキリストは單なる一天使であり、それは救いを与へることはなく、それへの道を示すのみで、キリストの受難と死はイルウジョンである、と主張した。

こうなるとキリスト教は黙っていられないのでその討伐十字軍が起された次第である。キャサールスは、宗教組織を有し、完能信徒（perfect）と信者をわけ（consolamentum）、後者は信者大衆とし、前者に司教、執事職等をもうけたが、南部フランス、北イタリア等に司教管区一一を数えるに至っていた。異端征伐は二つの側面を持つ。一は一七世紀に盛行した魔女裁判（A trial of witches）の様に被疑者をとらえて審問、拷問し、追放、財産没収、はては火あぶり等にするものであった。これは世俗裁判所が執行する。魔女裁判はこれで無辜の被疑者が多く惨殺されたというが極東の君子国そして羊の民族日本には幸いかかる例はない。せいぜい八百屋お七一件の火あぶりで、フス、ジャン

ダークをはじめとして炎刑の例にこと欠かない欧州の実行とはへだたること雲煙万里である。イスラムには炎刑の例はない。

異端糾問は第三回十字軍のときはじまり、法王ルシウス三世（**Lucius III**）に皇帝フレデリック一世（**Frederick I**）が加わってはじまった（一一八四）。このとき出た布告が有名な**Ado abolendam**である。

他は当然十字軍による異端軍事弾圧でこれは種々試行錯誤をくりかえし、一二四四年（法王ルイ九世（**Louis IX**）の下）ピレネー山近傍のパーフェクトの根據地であったモンツェグールをおとして成就した。キャサールスは潰滅し、生き残ったものは北イタリアに逃亡した。キャサールスへの改宗、改心は種々勧告されたが、これに心動かすものは一人もなかった、という。十字軍の方でもキャサールス討伐は種々混乱を惹起し、ツールーズのレイモンド六世伯の加わった軍隊は、キリスト教徒、キャサールスを倶に殺戮した。

一三世紀に入ってもキャサールスの追及はやまず、異端審問所（**The Inquisition**）が設けられ、ドミニカ修道会、修道士会等がこれにあたり、キャサールスをあぶり出しては抹殺していった。しかし二〇世紀に入るまで生きのびた異端派ワルデンス（**Waldenses**）等の例もあった。

第五回十字軍

異端派征伐と平行して第五回十字軍が催された。こうして継續する十字軍は、（一）エルサレムの確保が所期の目的を達しないため、（二）イスラム勢力の西欧浸透を阻止しておかなければ、將来西欧の運命が危胎に瀕する。（三）東西交通、交易のイスラム勢力による中断をたちきらねばならない、等の思惑から次々とこれが発出されたのであっ

た。そのエネルギーと費用捻出のすさまじさはたとえるものもない。

この十字軍はインノセント三世の後継オノリウス三世（**Honorius III**）によって召集されたがこのときはエルサレム奪回を目ざしてエジプトに侵攻した。これはエジプトの勢力が近東に及んでいたのと、エジプトを制圧されることは、イスラムにとって喜ばしいことではなかった為であった（つまりはエルサレムを回復せんとしてのエジプト侵寇であった）。十字軍は地中海のシナイ半島西岸ダミエッタを占領した。しかしこれは十字軍と王軍激闘の一七ヶ月后の一二一八年六月であった。両軍疲弊し、エジプト王アルカミル（**Sultan al-Kamil**）は戦闘継續に望みを失い、ヨルダン河西のエルサレム王国を十字軍に明け渡す決定を下した。みかえりは十字軍全軍のエジプト撤退であった。

問題は解決したかにみえたが、ローマ法王使節枢機卿ペラギウス（**Pelagius of Albano**）がこれに猛烈に反対、戦闘再開となり彼はカイロ城下の誓をかかげて進軍したのはよかったが、今度は、戦闘二一ヶ月に及んだ末、彼の軍隊はナイル河の氾濫にまきこまれて潰滅。最后彼自らエジプト撤退を申し出て、第五回十字軍は散々の結末を迎えた。

この后も尚、十字軍は前后三回を数え、すべてで明確なそれは八回となるのはこの為である。第五回十字軍の后、皇帝フレデリック二世（**Fredelick II**）は、オノリウス三世によってその地位にのぼせられたが、甚だ野心的な皇帝で、エルサレムのイサベラ（**Yolando**）と結婚して十字軍を名のり、パレスタインに軍をすすめた。この動きに法王庁は警戒し、疑心をつのらせ、彼を破門した。フレデリックはこの策動の中でエジプトのサルタン・アル・カミルと談合し、一二二九年二月一八日、一條約を得て、遂にエルサレム、ベツレヘム、ナザレ、シドン、リッダ等を手中にした。しかし法王庁は、イスラムは戦滅しなければならぬ、としフレデリックの決定を否認した。これから東方フランク（西欧派）と彼の戦いが断続するが、この中で一二四四年に至りトルコ軍がまたエルサレムを奪回し、後、エジプトのサ

ルタン・アヤブ（Ayyub）がたってフランク・パレスタインの殆んどとダマスカスを回復した。フレデリック帝の壮挙は無に帰した。

この后フランスのルイ九世が十字軍に従事するが成果なく終る。エジプトではマメルーク（Mamelukes）王朝が出現し、イランには蒙古族が進出してイスラムの事端は漸く繁くなる。マメルークはエジプト王朝に仕えた奴隷身分であったが、甚だ好戦的民族で東方から同族を集めてエジプト王朝に代り軍事王朝を開いた。一二五〇年のことであった。これはトルコの為に一五一七年、一旦亡ぼされる。イランへは蒙古族が進出して一二五八年、バグダッドを占領し、略奪の挙句、全イスラム驚愕の中で最后のアバシッド・カリフを殺害した。彼等は一二六〇年、アレッポとダマスカスへ進出した。ここでイスラムはふるいたち、これに一戦を加えた。世界史上天下分け目の決戦と稱されたナザレ近傍エイン・ヤルト（Ayn Jalut）のそれで、一二六〇年九月三日、マメルーク・サルタン・クチュツ（Qutuz）と彼の將軍バイバール（General Baybars）の軍がモンゴルのネストリアン・クリスチャン・キトブガ（Kitbugha）を敗死させた。これでエジプトのマメルーク王朝と中東のイスラムは破滅をまぬがれた。またモンゴルのキリスト教帰依のはなしも立ち消えとなった。

エイン・ヤルトの后、キトブガの影響にあったパレスタインとシリアは開放された。バイバールはフランク討滅の軍を展開、成功をおさめてアクレに進出、カエザリア、ハイファ、アルサフを一二六五年に手中に収めた。そして翌年サファドの城塞を、一二六八年にはアンチオークとベルフォルトの城塞を占領した。

十字軍の最后

フランク今や旗幟たれ、十字軍の名空し。ルイ九世は、尚十字軍を叫んだが（第八回）、一二七〇年チュニジアに客死し、バイバールは、このしがらみからのがれて、翌年フランクの討滅に専念。サフィタ、クラク、モンフォルトの三城を抜いた。一二八九年に至ってサルタン・カラウン（**Qalawun**）はトリポリを占領した。彼の息子サルタン・アラシュラフ・カリル（**al-Ashraf Khalil**）は、ベネチァ人が街路にイスラム商人達を殺戮したアクレに入り、一二九一年これを陥して十字軍重據点をイスラムに回復した。こうして十字軍今や戦意なく、同年八月までに残った城塞は次々イスラムに攻略された。曰く、チール、ベイルート、ハイファ、トルトサ、そしてアスリット。ただテンプラー騎士団（**Templars**）が小島アルアドを一三〇三年まで辛うじて保持した。

テンプラー騎士団の後にも十字軍は尚執拗にイスラムに戦いを挑む。しかしこのたびは聖地、聖墓への回帰は望むべくも、めざすべくもなく、攻撃目標はトルコの勢力圏へのそれとなる。その執念は驚くべきものがあった。

何故十字軍がそこまでイスラムに挑戦するのかは、そこに宗教的情熱をみる以外には矢張り適当な説明はない。宗教が戦争、一揆と結びついた場合、ナショナリズムと一味違った強烈さを発揮する。敗れた後の十字軍の戦いに一種の凄絶さを感じないわけにはゆかない。

オノリウス三世、グレゴリー九世のアトの法王達も決してウルバン二世等とえらぶところはなく十字軍を叫びつづける。一三四四年には新十字軍はスミルナに進寇し、バルカン半島にも進出した。しかし今更強大となって欧州をも席捲する勢いのトルコ帝国に歯向かえるものでなく新十字軍は結局一三九六年、ニコポリスで、また一四四四年にはパルナで夫々敗れ去った。

しかし、また一隊はエジプトのアレキサンドレッタを一三六五年に襲い、シリア、エジプトに対する攻勢として新

十字軍は長くその據点を次の地点に保持した、ロードス島を聖ジョン騎士団（St. John the Knights）が一五二二年まで、サイプラス・フランク一王国・一四八九年まで、同じくベニスの先端基地・一五七一年まで。

このキャソリシズムの執拗さは異常であると思えるが、それは常識からの判断で、宗教心からすればこれが普通であろう。そうすると宗教は平安な心のいやしと共にあくなき戦いの情熱の源となる謂である。十字軍が起した種々の影響は、それが一一世紀から一六世紀に及ぶという期間の長さであるから、実に様々なものがあった。まずその影響というのはそれが蒙った五世紀にも及ぶ期間の中で、世の中そのものが大いに変化したことから受けた逆影響も多い。與へたものと受けたものと、十字軍の歴史は長く複雑である。ドイツ農民戦争の背景となる時代の変化については前稿にのべた如くであるが、十字軍の蒙った時代の変化は、壮園経済、封建経済の変質、国家的宗教統一、商業の発達、資本主義的生産への展望、百年戦争（一三三七―一四五三年）、チュートン民族のバルチック戦争（ドイツ国家、国勢伸張の為）、そしてルネッサンス、新世界発見、宗教改革等々である。それは勿論長く広汎である。

十字軍の影響

十字軍が世界に與へた影響はまずキリスト教とイスラムのあくなき爭闘をこの世にもちこんだ事であった。これは後世にひびく悪影響であって消し難い。イスラムはもと、クリスチャンに対しては寛容を持していた。イスラムの間に住む彼等に対してである。それが十字軍のあるものがイスラムの人々を方々で虐殺したので、イスラム教徒の態度もそれにつれて悪化したのであった。こうした十字軍の態度はさきにみた如くマメルーク族や蒙古族と共にアラブ貴族制を犯し、アラブ文化の都市型、開明的、高知性と教養をそこない、それらを偏狭な宗教性におとしめ、イスラム

が有していた西欧に対する優位をくつがえした。これはもとより十字軍のみの影響ではなくルネッサンスのそれによることも大きいとされる。

第二に、十字軍は第四回のそれが介入してビザンチン帝国の帝位を混乱させたが、以后それは国力と文化を失い、一二六一年にその政府はコンスタンチノープルに回復されたが、トルコの圧迫を蒙り、一四五三年積弊の結果、サルタン・モハメッド二世（Mohammed II, 1451-81）によって亡ぼされた。キリスト教は地をはらい、イスラムが広められた。

第三に、十字軍の費消は莫大なものに上ったが、諸侯の富はこれで枯渇し、それが増税のかたちとなって民生を圧迫し、都市からの借財も殖えた。しかしそれと共に東西の交通が、十字軍とならんで活発となったし、最后は十字軍敗亡の為、東西の交通は中東で遮断されてしまうのであるが、十字軍の間、種々の東西交易がさかんで、これが諸侯や、西欧に富をもたらしたことも事実であった。これらは地中海貿易として船による帆送であったが、穀類、木材、馬匹等を運び、東方からの特産品としては以下の物品が多く流入した。香料、織物、壁掛け、羽毛布団、じゅうたん、薬品、砂糖、宝石、香水、ガラス、鋼製品等。これらは贅沢を奨励し、この購入の為に破産した諸侯もあったという。石造り、煉瓦造りの技術が伝はり、家屋、城塞、教会等の建築にこれが用いられる様になった。この地中海貿易が貨幣、銀行、為替等の経済活動を刺激したことも大きなものがあった。

しかし十字軍の影響で最大のものは、先にふれたスペイン、ポルトガルによる新世界発見に名を借りた世界植民地開発主義の発展であった。これは陸路の欧亜交通がたちきられた為海路によって欧亜を結ぶという大壮擧として発出し、その后オランダ、英国をはじめ各国がこれに追随して世界植民地主義が歴史をおおうこととなったのであった。

十字軍の敗亡がこれを結果したのであった。これについてはバスコ・ダ・ガマ、コロンブス、ディエゴ・カム、マゼラン等の活躍を叙すると共に前稿に於て取扱ったので繰り返さない（北島平一郎著作集第三巻、（4）近代外交史三つの視点への試論、――十字軍から地理的世界発見へ――、大経法大出版部、一九九七年）。そして忘れてならないのは、イグナチウス・ロヨラ（**Ignatius of Loyola**）によって一五四〇年に設立されたカソリック教団（ジェスイット・**Society of Jesus. Societas Jesu**）である。これはローマ法王庁第二回バチカン会議（**The Second Vatican Council**）の下に行はれたのであるが、十字軍敗滅の后、カソリシズムの復興の為に結成された。世間はこれを反宗教改革（**The Counter Reformation**）と呼んだが、まさに旧派カソリシズム復興の為の組織であった。これについては一向一揆等との関連で後に一項を設けて取扱はねばならない。ジェスイット教団は全世界にとび、リフォーメーションと戦い、カソリシズム伸張の為に渾身の働きをする。日本ではあまりにも有名になったフランシス・ザビエー（**Francis Xavier**）であるが、彼もその創始者の一員で、ポルトガルのゴア占領の確保とカソリシズムの普及の一翼をになう活動をそこで強力に展開する。そして彼は一五四六年ゴアに於ける異端審問所の設置をジョアン三世（**João III**）に進言、これができるとそこで主として改宗ユダヤ人を火炙りの刑に処した。それは彼等が、ザビエーの眼には正しい信仰に背いた神をも恐れぬ者と映ったからである、という（小岸昭、京都大学教授、一九九七年五月一〇日、毎日新聞記事）。ザビエーの実像はかかる描写が眞実であろう。ザビエーは日本に渡ってきたカソリック宣教師の第一号で、日本でのキリスト教伝道の基礎をきづいた人物であるが、その日本の行跡はあまりにも美化され神聖化されすぎている。ザビエーは十字軍宗教戰爭の最后のにない手であるから当然激しい戰闘的意欲で任地の極東に赴いてきた筈である。その実行も十字軍の戰いと異なるところはなかったと考えられる。日本では明治政府の徳川幕府貶黜の為、キリスト教彈

圧史をとりあげ、そこだけを強調して明治政府のお先棒をかつぎ、明治政府の正義と徳川幕府の悪逆をきわだたせる作業が行はれたが、ザビエー聖人化もその一環として行はれたのである（ローマ・カソリック聖人表には、一二月三日を祭日としてフランシス・ザビエーが記録されている。ロヨラは七月三一日。この意味では、明治政府も十字軍の一翼をになって怨敵の廃仏毀釈を行い、カソリシズム擁護の為憎き異教の徒徳川幕府におくればせ乍ら最后の一撃を下したのであろう）。

種子島銃やキリスト教が日本に伝来したのは我ヶ国戦国乱世の眞只中で、その短い覇者となる織田信長は、長く一向一揆と戦い、仏教と敵対していたので、西洋の新知識とならびこの新来の宗教に興味を抱いたのであろう。キリスト教はザビエー以后その南蛮貿易の利益と共に九州諸侯に広く受け入れられ、セミナリヨや教会堂がたてられた。信長もルイス・フロイスに対し宣教師の京都在住を許し、又オルガンチノに安土の教会、バリニャーニにセミナリヨの建設を許可する等している。信長時代の旧教信徒数は二〇万を越えていた、といわれる。一五世紀初頭より、日本では土一揆、馬借一揆等まことに猖獗し、加賀一向一揆は一四七四年に勃発して応仁の乱を含んで三河一向一揆（一五六三）、伊勢長島一向一揆（一五七〇）、越中一向一揆（一五七二）と荒れ狂った。信長が最后伊勢長島一揆を平定（和議）するのは一五七四年のことであり、この間のキリスト教の伝播と一向一揆の関係もまた考察の対象としなければならないであろう。

第十章　農民戦争（3）

ヘルフェンシュタイン伯一家

ドイツ農民戦争は、宗教的に指導されたそれであったことは先にみたが、その宗教戦争の特異な情熱と性格については、十字軍のそれらを種々検討してたしかめた。

ここで愈々ドイツ農民戦争が荒れ狂った二年間の經過と事蹟をふりかえってみることとなる。ドイツ農民戦争の時代的背景についてはさきにみたが、この時期の欧州は一つの時代的転換を迎え、農民騒擾も処々に起っていた。いまみる一向一揆とも同時代史を形成している。これは大いに注意しなければならない。キリスト教と浄土眞宗と、宗教は異っても、それにささげ、それから受ける力に対する信仰はかわりがない。宗教が戦争を指導する力がかわらない。

農民戦争はドイツ南部に猖獗したが、同様の騒擾は、一五世紀末、一六世紀はじめ、ハンガリー、オーストリア、スイス、オランダ等にも起っていた。ドイツでは、チューリンゲン、ニュールンベルク、ザクセン、フランゲン、シュバーベン、ウエルテンベルク、エルザス、バーデンからスイス国境地帯に及ぶ広い地域にそれがあった。ハンガリーの農民蜂起は、一五一四年の春、六万人の参加があった。スイスでは一五一四年、ベルン、ゾロトウルン、ルツェルン、ショルンドルフ市等で農民蜂起があり、三千人から五千人の農民が集まった。オランダのそれは一四九一―九二年の早い時期であった。

ドイツのそれらの最盛期は一五二五年春で、ライプハイムでは三〇万人を下らない叛乱があった。この頃各小都市では叛乱農民にそのゲートを開くことがあり、各諸侯、貴族は対応に苦しんだが、戦備がととのうと攻撃に出て農民軍を打破り、首謀者をとらえて斬首した。しかし勢いが強いときは農民と話し合いに入り、その要求を裁判所に提出することをすすめてその勢いをくじく等の戦術を用いた。裁判所が農民の主張をとおすことはあり得なかった。農民

反乱はこの頃城から城を攻めてこれをおとした。この頃「統合派遣隊」の指揮者ゲオルグ・メッツラー（Georg Metzler）は竿の先に農民の靴（Bundschuh）をくくりつけ、ドラムを打ならして進軍した。これが農民戦争の旗印となり、彼等はブントシューと呼ばれることとなった。戦闘は、凡そどのそれでも際だった変化はなく、攻撃、防禦、撃退、陥落等であったが、このとき双方共有名であったヘルフェンシュタイン伯（Count Ludwig von Helfenstein）とヤコブ・ロールバッハ（Jakob Rohrbach）、通稱ジャックレイン（Jäcklein）の戦いは凄惨を極めた。

ヘルフェンシュタイン伯は、彼の妻が皇帝マキシミリアン（Maximilian）の庶子であったので彼女が現皇帝カール（Charles V）とその弟フェルジナンド（Ferdinand）の異母姉妹であるという縁戚関係にあった。二七歳で農民戦争で勇名をはせていた。このとき彼はウエインスベルクの街にいた。ここで市民が、やってきた農民代表に門を開こうとしたが、伯はこれを許さず、問答無用と、騎士や武装兵を使って彼等をみな殺しにした。ジャックレインは「伯に地獄の死を」と叫んで復讐を誓った。

彼は農民軍をひきいてウエインスベルクに至り、これを包囲した。市民は農民軍と呼応し、あるものは城壁の秘密を教えた。農民軍の使者が降伏をすすめにゆき、女性、子供を安全な場所にうつす様勧告したが打ち殺された。四月一六日、イースター・サンデーで、城内の騎士は教会に集まってミサとサクラメントの儀式を行った。ヘルフェンシュタインは妻と幼児をともなっていたが、街の市場へ出向き人々にスツットガルトとパラチネイトから援軍がくると彼等を勇気づけた。伯はこのときでもまだ農民軍をみくびっていた。ミサが終る前農民軍の総攻撃がはじまり、有名な農民黒衣隊が城に殺到した。市民は城内から農民軍をたすけ、遂にたまらず伯は、僧侶を派遣して「平和を、平和を」と絶叫させた。自身は逃散をはかったが市民達にとらえられた。タウンの城門は内側からあけられ農民兵が乱入し、

殺戮がはじまった。ヘルフェンシュタイン伯と妻、幼児は他の騎士、護衛、執事達と秘密の階段からタウンの教会尖塔へのぼった。しかし農民兵がせまってきた。一騎士はすすみ出て、三万金グルデンの身代金を申し出た。「お前は大酒樽一杯の金を申し入れた。しかしお前等は死ぬのだ。我々の殺された兄弟達の血の贖いの為に」、これが答であった。そして彼は打ち殺された。農民が棍棒で彼の脳天をなぐり続けた。街の略奪が求められたが、教会と修道院と城だけのそれがメッツラーとヒプラーによって承認された。そして虐殺の中止が命令された。伯爵と妻と幼児もその中にまじっていたが幼児は傷ついて血を流していた。ジャックレインは叫んだ「ヘルフェンシュタイン伯、ダンスを披露する番だ」、と。伯爵夫人が「お慈悲を」と叫び、幼児をかき抱き乍らジャックレインの足許に身を投げ出した。「おお、お前は夫の為に慈悲を乞うのか、しかしそれは許されぬ」。彼は夫人の手をとって引起しあお向けに投げ倒した。そしてその胸を踏みにじり、「兄弟よ、みよ、ジャックレイン・ロールバッハは皇帝の娘の上にひざまづいている」と叫んだ。伯爵は全財産とプラス六万グルデンの身代金を申し出た。夜明け間近となっていた。「六万のパール樽は必要ない」とジャックレインは言い放った。「ひざまづいて懺悔せよ。お前は再び日の光をみることは無いのだ」。このとき昔、伯の祈りの間笛吹きの役目を務めていて今は転身してジャックレインの護衛兵になっている男が進み出て言った。「私はお前のテーブル・ミュージックを長くふいていたので、お前の好みの曲を知っている。お前の最后のチャンスにそれを吹こう」、こういって伯の帽子をとってかぶり笛を吹いた。それはすぐ終った。そして伯は槍ぶすまの中を再び笛の音色にあはせて導かれた。伯爵夫人は、この光景と伯の最后をみる為に二人の兵に支えられて起立させられた。

これはドイツ農民戦争の一齣である。伯爵はこの后刺し殺された。幼児は教会に連れてゆかれたが、夫人はこえた

ごに入れられてハイルブロンに送られた。

ハイルブロン

この結果に農民隊は勝鬨を挙げたが、時を移さずホーヘンローエ伯は大砲と弾薬を「統合派遣隊」におくり、農民隊はハイルブロンに進んだ。同市の士気は全く低下していて、ブルジョア市民達の力は失はれていた。彼等はなんなく入城した。同隊と市評議会（**City Council**）は交渉に入ったが次の結果が得られた。

1．市評議会は統合派遣隊に補助金を支給し、一五〇人の兵士を農民軍に補充する。

2．十二ヶ條は遵守される。

3．チュートン貴族以外の一切の家屋は略奪の対象とならない。

市側の誰も、しかしこれを守るという気持をもっていなかった。それは時を稼ぐ為だけだ。機会がきたらすぐ旧状を回復する、と。反対に、貧民、タウン・プロレタリアート、貧窮ギルド民等のチュートン騎士に対する怒りと恨みはすさまじく、騎士の家々は勢いに乗じてたちまち略奪された。全証文は破られ、城壁周辺の堀に投げこまれた。ワイン、銀製品、家具等が家々からひき出され、広場で競賣された。ジャックレインが、これを主宰した。女達は僧侶の祭服を引張り出し、これを自分や子供達の着れる様な丈とかたちにきりさいた。

このとき農民隊側に騎士ゲッツ（**Gotz von Berlichingen**）のひきいる穏健派の一隊があらはれた。これは騎士側に、当然非常に有利に働いた。ゲッツはこのとき農民隊と談合して次の様な反動の決議を採択した。

1．十二ヶ條中のある條項はその実施を次の機会まで停止される。即ち、ウエイガン（**Weigand**）、ヒプラー

(Hipler)、ハイルブロン常設委員会が全体会議の為の帝国改革プランの概略を起草し、これが決定されるときまで。

2．殆んどすべての旧封建的権利、課税は暫定的に維持される。

3．略奪は中止され、恭順が暫定的に立憲的当局に捧げられ、一切の叛乱分隊の結成は中止される。

これは、まことにこの時期恐るべき反動で、これが一般化すれば、そこで農民戦争は終結せざるを得ないことになる。そしてこの改革案が、統合派遣隊の会議にまでかけられることになり、ジャックレインと彼の一隊は本隊から阻外されることとなった上、この帝国改革案は右会議を辛うじてではあるが、無事通過したのであった。まことに権威の強力さと、それへの服従の素直さは洋の東西を通じてかはらないし、エンゲルスが農民戦争に革命への情熱をそそぎこもうと躍起になったこともわからぬではない。

一般的に農民戦争は貴族や騎士が、冷酷無惨に農民兵や一般農民を殺戮したのと様変わり、農民軍の中には穏健派の行動も含まれていたことが特徴的であるとされる。それがよい結果を生むことに働いたという面もある、というがこの面を強調することは、当然エンゲルスには面白くないのでこういったものは捨象してしまって農民戦争を領主の苛斂誅求とプロレタリアートの反抗に要約限定してしまう必要があったのであろう。

ゲッツの穏健的行動がある一方で農民軍の進撃は一五二五年の春から強化され各司教区や大司教区を襲撃し、ある教区では大司教が逃亡していた。その例はストラスブルク、マインツその他の大司教区で、前者では農民軍が近づいてきたとき、大司教が逸早く逃げ出して司教の手で改定一二ヶ條が農民軍代表との間で調印され、一万五千グルデンの賠償金が支払はれた。後者ではマインツ、アシャフェンベルク等独南部大司教区で農民軍の襲撃が最高潮に達して

いた。帝国自由市フランクフルト・アム・マインでは市のプロレタリアート代表が市評議会にせまって四五ヶ條を含む権利章典を承認させた。そこでは叛乱委員会（**An Insurrectionary Committee**）が設立されて、一靴職人がリーダーシップをとり、近隣農村の農民達や小都市と改革的連携を成就させた。ゲッツ、メッツラー等の統合派遣軍はウエルツブルクを目指しまたアシャフェンベルクを支配下に置いた上、フロイエンベルクの占領を企図して前進していた。

シュワビッシュ・ホールでは三千人の農民が市を占據しようと立上ったが、僧侶のワイン貯蔵所を襲ってそこから持出したワインを一晩僧侶達と痛飲するということをやり、擧句三千人みな眠りこけてしまった。翌暁方にそこへきた友軍が、これをみてあきれ、空鉄砲を打ち上げた為、大混乱が起った。三千人は酔いどれと眠りこけで酔眼朦朧とし右往左往と逃げまどい、一場の大失態となって、一擧に恥辱の大失敗となってしまった。和議となって彼等は市に忠誠を誓い、夫々の家へ帰ることを許された。ウエルテンベルク州へも農民軍が向ったが、この戰いは農民軍の穏健派の勝利となった。この軍の頭はマタレ・フォイエルバッハ（**Matern Feuerbach**）という旅館の主で、職業柄各方面と友好的で軍の頭となったのも止むを得ずなった面があり、それも彼のパトロンの承認の下にという事情で、農民軍をひきいてもジャックレインとは一線を画しこの社会的、人的関係を維持する心算が強かった。シュトットガルトをおそったがここは、農民軍の接近で執権職はいち早く逃亡し、主教のマンテル博士（**Dr. Johannes Mantel**）が出て交渉に当った。彼は新教義の採択者で、この為、入牢したが、農民達によって救出されるという体験者であった。賠償金が要求されたが、これは教会施設の為という名目で額も穏健であった。略奪を禁止事項とし、その悪名をもった一軍を阻外し、彼等も市中には二日間とどまっただけで退去した。こうした例もあったのである。

フランコニア農民騒擾

ライン河支流のマイン河とトイベ河あたりを中世の公爵領からの呼稱であるフランコニアと稱するが、そこにも農民戰爭が猖獗した。フランクフルト、ミュルツブルク、ローゼンブルク、ハンベルク等が中心都市であった。ここでは宗教的政治的闘爭と稱される如く、宗教改革と農民戰爭が相たずさえて進軍した。即ち農民の指導は宗教人が行ったといって過言ではない状況であった。一五二五年の三月から五月にかけて農民戰爭はここで大いに荒れ狂い、それは全農民戰爭中最大のそれとなった。

ここでは先にふれた如く宗教的葛藤が激烈に展開されていた。ルッターのライバルとして名高いカールスタット博士（**Dr. Karlstadt, Andreas Bodenstein**）がウイッテンベルク城教会を逐はれて後、当地ローゼンブルクに移り住んでいた。そして今一人の伝道師ヨハン・ドイシュリン（**Joahann Deuschlin**）がここで反ジュウリイ闘爭に従事して新教義をとなえ、ジュウリイの排除と教会堂（**Synagogue**）破壊活動を行っていた。ドイツに根ざす反ジュウリイ運動はここにもその一つの要素をもっていた。このドイシュリンの門弟の一人で彼の協力者であった伝道士にハンス・シュミット（**Hans Schmidt**）という盲目の人がいたがこの人が、ローゼンベルクにいたチュートン教団（**Teutonic Order**）のある者達に働きかけて彼等を宗教改革運動に結びつけていた。その組織のかしらの一人にメルキオール（**Melchior**）がいたが、この人は宗教改革に傾斜して、ハンス・シュミットの妹と結婚し、二人の伝道師は、この教団に働きかけて、遂に教団長を追い落してこれを新教団長クリステン（**Christen**）にかえてしまった。これは、しかし当然、ウエルツブルクの監督機関との衝突となり、両派の間に爭いがまき起ったが前者の方が優勢を維持した。フランコニアではかくの如く宗教改革にのっとった動きが宗教人の間で激しかったが、これが当然この地方の農民運動と結合してゆ

く。宗教改革の一環としてローゼンブルクの前市長であったクンプ（**Ehrenfried Kumpf**）は偶像破壊活動を展開していて、これはカールスタットの運動と連携する。この破壊活動はまことにすさまじく宗教的偶像や絵画、ミサの書物、バージン・マリアの礼拝堂などを根こそぎ破壊し、これに呼応して人々はこれらをトイベ河に投げこんだ。その上城外の壮麗な教会やその美々しい高価な飾りもの等を無惨にズタズタにした。日本でも明治維新当時、廃仏毀釈が行はれて同じ様に仏像や飾りものの破壊がすさまじく全国的に行はれたことは前にふれたが、これは政府指導によるものであった。しかしドイツではこの運動は反中央宗教改革で地方的反抗的な激発であった。

農民要求

このときローゼンベルク市内の人々と城外の農民運動が結びついた。その連携の下に三月二六日に農民代表が、彼等の要求書を市評議会に提出したのである。それは元僧侶によって起草されていて、最近課された封建的税金は過重であることを主張し、その廃止を宗教的感情に訴えて強請するものであった。交渉が行はれたが、成果はなかった。

カールスタットはローゼンベルクに移住したとき、その首に懸賞金がつけられていたが、彼は市中にいて安全であり、街々に説教することをやめなかった。市の評議会内委員会は、外部と連絡して種々運動画策し遂に彼の説教禁止、市外追放を決議する事に成功した。しかし彼はドイシュリン、クリステン、クンプ等の協力で、ストラースブルクに向って退去した体をとり、実際は市中に潜伏して活動を續けた。彼の言説は、パンフレットに印刷されて要所に流布された。

このとき市評議会に大変が起る。それはスワビアン騎士で改革運動の為にスイスに逃れていたメンチンゲン

(Stephan Menzingen) が一五二五年になってドイツ（ローゼンブルク）に戻り、農民要求を市評議会に提出すると共に三月末迄に運動して新しい「市人民委員会」を結成したことであった。これは人民の賛同するところとなり有力人士もこれに續々参加することとなって遂に旧市評議会は解散に追いこまれたのであった。まことに一大変事が起ったのであった。これによって「福音の兄弟愛（Evangelical Brothery Love）」が前面に押し出されることとなり、人々の平等と特権の廃止が高調された。

「何人も他人より多くもつな、お互いに足らざるを貸し与へよ」が、スローガンとなり、農民と市民の同盟が成就してローゼンブルクの農民も戦争にたち上ることとなった。このときの騒擾の特長は（1）騎士が農民戦争に参加して彼等を指揮した事であった。彼等が何故そうしたかは、彼等の貧窮化とその暗い前途の見とおしからか、という見解もあるが、フロリアン・ゲイアー（Florian Geyer）の如くこれに積極的に参加し、ローゼンブルク戦隊と自由戦士等を集めて独自の軍隊「黒衣隊」を編成して従軍した者もあった。時代の変化を察知したとして、風雲に乗じようとしたのかも知れぬ。この黒衣軍は農民戦争中の最強軍団と稱され保守層を震撼した。彼等の農民指揮は、職業柄のもので、強力を発揮した。（2）農民連中は、目的地といはず、行軍中と言はず、あたりかまはず略奪、破壊の限りをつくした。人呼んでこれらをカーニバルの盛宴か、農民戦争か。ワイン戦争か、農民戦争かといった。即ち「兄弟愛」に参加しない牧師の家とか、各修道院、チュートン教団等をみつけ次第襲った。家屋を破壊し、長持をみつけ出しては略奪し、ワイン貯蔵所からワインを根こそぎ持ち出した。そして襲撃者は、酒壜をならべて酒まみれとなり泥酔した。大ヘンな農民戦争であったが、これはこの期の農民戦争の属性であった。

この事は農民襲撃にあって司教達が最初これに応接する意図も手段も失って、ただ手をこまぬいて、近隣の助力を

求め、スワビアン・ハーグのたすけを要請する等して効果なく、事態が変化し、近隣の諸侯の来援を待つという様な甚だ退嬰的な態度に出た為、農民軍は何の抵抗も受けずに各地に進軍するという有様であった為、お祭り騒ぎも起りやすかったのであった。これらは、ウエルツブルク、チュンゲン、ローゼンベルク、バンベルク等で起った。

（以下次号）

（参考文献はこの項の終りに一括掲載の予定）